

和田英作《壁画落慶之図》の制作背景と図像源について
——近代法隆寺研究の隆盛とシャヴァンヌの壁画を中心に——

岡見理沙（無所属）

本発表では、和田英作（1874-1959）が、1918（大正七）年の第12回文展に出品した《壁画落慶之図》（法隆寺蔵）を取り上げる。法隆寺研究の隆盛と、偉大なる絵画としての歴史画と壁画への注目の交点にある作品として、制作背景を考察する。聖徳太子と群臣の姿には、フランスの壁画家ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ（1824-1898）の《殉教聖人の行列》（パリ、パンテオン、1877年頃）が重ねられたことを指摘する。

本作は、縦192.3センチ、横418センチの大画面である。法隆寺金堂で、袈裟を身に着けた聖徳太子と群臣が、白髭の男性に導かれて壁画を見る様子を描く。先学によると、1921年が聖徳太子一三〇〇年遠忌にあたり、組織された奉賛会にいた和田の知り合いから奉納画の依頼があったという。また、和田自身にも金堂壁画保存への関心があったこと、画中人物のモデルなどが、議論の中心となってきた。

これに対し本発表ではまず、近代に進展した法隆寺研究に照らし、本作の同時代背景を探る。1905年には、現存する法隆寺金堂などの建立年代をめぐる「法隆寺再建非再建論争」が始まり、金堂壁画の研究も盛んになった。壁画の保存状態が問題視されると、壁画保存方法調査委員会が1916年に発足し、保存方法を検証した。本作の発表当時、金堂壁画は注目を集め、その中核を担ったのが東京美術学校だった。遡る1911年、美術学校で「上宮太子祭」が開催され、「芸術の開拓者」の太子像を本尊とした。

続いて近代の「壁画」の意味について検討する。近代社会で歴史画は価値の高い主題だったが、天野知香によれば、フランスでは「歴史画の死」が指摘され続ける一方で、偉大なる絵画の最後の避難所としての壁画の重要性が注目されていた（『装飾/芸術』ブリュッケ、2001年）。19世紀末の多くの若い画家たちは装飾に熱狂し、シャヴァンヌへの心酔していた（『装飾と「他者」』ブリュッケ、2018年）。後年、壁画に取り組んだ和田も「尊敬崇拝して止まないのは佛蘭西のピューキス・ド・シャヴァンヌ」（「壁画装飾」『中央美術』第2巻第5号、1916年）と述べた。和田は1924年の手紙で「法隆寺壁畫の剥落せるものを通じて其の壁畫のrestrationをして見たいと思つた」と振り返った。本作は、現在の金堂壁画には剥落して色が残らない部分に群像を配置している。人物のポーズや組み合わせにはシャヴァンヌ壁画の群像を参照し、太い柱が並ぶ金堂内部の空間とシャヴァンヌの壁画が置かれたパンテオンの空間を重ね合わせたことを具体的に指摘する。

以上の考察を踏まえ、「正統な絵画」としての壁画という価値観を持っていた和田は、法隆寺金堂壁画の保存をめぐる同時代の議論を背景に、シャヴァンヌ作品の図像を引用することで壁画の正統性を担保し、金堂壁画の誕生を描いたと結論付ける。